

# A histopathological study of small early carcinomas of the stomach-Special reference to the histogenesis of differentiated type carcinomas

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2014-10-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 甲田, 証 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/989">http://hdl.handle.net/10271/989</a>

学位論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位記番号	医博第 136号	学位授与年月日	平成 4年 3月26日
氏名	甲 田 証		
論文題目	A histopathological study of small early carcinomas of the stomach-Special reference to the histogenesis of differentiated type carcinomas (小型早期胃癌の病理組織学的研究—特に分化型癌の組織発生について)		

医学博士 甲 田 証

論文題目

A histopathological study of small early carcinomas of the stomach—Special reference to the histogenesis of differentiated type carcinomas  
(小型早期胃癌の病理組織学的研究—特に分化型癌の組織発生について)

論文の内容の要旨

目的：内視鏡やX線検査などの診断技術の進歩により小さい胃癌の発見が可能となり、その組織発生につき腸上皮化生より分化型癌が、胃固有腺粘膜より未分化型癌が発生するとの報告がなされている。今までに報告されている微小胃癌の大部分は、多発胃癌の副病変として病理組織学的に発見されたものである。そこで我々は、ほとんど臨床的に発見された長径2 cm以下の早期胃癌を使用し臨床病理学的に分析し、病理組織学的に背景粘膜との関連について検索し、胃癌 特に分化型癌の発生について検索を行なった。

方法：1978年から1988年までに手術切除された長径2 cm以下の早期胃癌222症例236病変について、粘液組織化学及び電子顕微鏡による検索を行なった。癌の両端10mmを背景粘膜とし、癌周囲の腸上皮化生の強さは、この背景粘膜において組織学的に判定した。

結果：1. 性別及び年齢：男性168人、女性54人(3.1:1)で、平均年齢は男性61.3歳、女性54.7歳であった。分化型癌162病変、未分化型癌74病変であった。男性では30歳代を除いて分化型癌の方が未分化型癌より多いが、女性では若年者で未分化型癌が多く、高齢者で分化型癌が多かった。

2. 癌の大きさ、浸潤の深さと肉眼分類：長径が10mmを超えると、分化型癌の割合が増加した( $p < 0.05$ )。癌の深達度は159病変がm癌で、77病変がsm癌だった。分化型癌より未分化型癌で陥凹型が多くみられた( $p < 0.05$ )。

3. 発生部位：男性では分化型癌がいずれの部位でも多かったが、女性では分化型癌は幽門腺粘膜領域に多く、未分化型癌は胃底腺粘膜領域に多かった( $p < 0.05$ )。

4. 背景粘膜における腸上皮化生との関連性：分化型癌の83.2%で背景粘膜の腸上皮化生の強さが中等度以上であり、未分化型癌の77.2%で軽度だった。分化型癌で胃底腺粘膜領域に発生したものは他領域のものより腸上皮化生との関連がみられた( $p < 0.05$ )。さらに、軽度の腸上皮化生を伴う幽門腺粘膜領域の分化型癌15例中8例で、癌組織が粘膜の上1/2に認められ、sulfomucin陽性、Ⅲ型粘液陰性だった。

5. 分化型癌の亜分類と背景粘膜：分化型癌を粘液組織化学と電子顕微鏡により混合型(胃と腸との混合型)と大腸型に亜分類した。さらに、背景粘膜の腸上皮化生をⅠ型(完全型、paneth細胞あり)、Ⅱ型(不完全型、sulfomucin陰性)、Ⅲ型(不完全型、sulfomucin陽性)に分類した。腸上皮化生の強さにかかわらず、分化型癌は混合型よりも大腸型が多く、大腸型は幽門腺粘膜領域に多くみられた。また分化型癌で幽門腺粘膜領域に発生した大腸型のは、Ⅲ型の腸上皮化生との関連性が認められた。

考察：胃の分化型癌の組織発生について、胃底腺粘膜領域のものは腸上皮化生の強さとの関連性がみられたが、幽門腺粘膜領域では関連性はなく、胃固有腺粘膜より発生する分化型癌もあることが判明した。従来、胃癌発生とⅢ型腸上皮化生との関連性が強いことが言われているが、本研究では、幽門腺粘膜領域の大腸型の分化型癌においてのみⅢ型腸上皮化生との関連が認められ、胃底腺粘膜領域など他の領域では関連性は認められなかった。

論文審査の結果の要旨

胃癌の組織発生については、腸上皮化生粘膜より分化型癌が、胃固有腺粘膜より未分化型癌が発生するという報告がなされているが、癌発生の実際はより複雑であることを明らかにしたのが本論文である。本論文は胃癌の組織発生について腸上皮化生との関係を検討したものである。

内視鏡・X線などの診断技術の進歩により微小胃癌が発見されるようになってきた。本論文では2 cm以下の早期胃癌222例236病変について、胃癌の分化度とその背景粘膜を病理学的に詳細に検討している。

従来、胃の腸上皮化生の判定には胃小彎側の標本についてなされていたが、本論文では癌の両端10mmの背

景粘膜において腸上皮化生の性状と程度を判定したところに、新しい視点がある。

男女比、分化型癌・未分化型癌の頻度など背景因子については他の統計と特に偏りはみられない。

癌の大きさと壁深達度に関しては、癌の長径が10mmを超えると分化型癌の割合が増加しており、肉眼型では未分化型癌に陥凹型が多く見られた ( $p < 0.05$ )。

発生部位の特徴として、女性では分化型癌は幽門腺粘膜領域に多く、未分化型癌は胃底腺粘膜領域に多いのに対し、男性ではいずれの部位においても分化型癌が多く認められた。腸上皮化生を形態と粘液組織化学的特徴により次の3型に分類した、即ち

I型(完全型、paneth細胞の存在が認められる)

II型(不完全型、sulfomucinの存在が認められない)

III型(不完全型、sulfomucinの存在が認められる)

に分類した。さらに、分化型癌も粘液組織化学的特徴と電子顕微鏡的形態により、Mixed type(胃と腸との混合型)とColonic typeとに分類した。

分化型癌とその背景粘膜を検討した結果、従来胃癌の発生はIII型腸上皮化生との関係が強いことが指摘されていたが、本研究ではこの関係は幽門腺粘膜領域の大腸型分化型癌においてのみ認められることが明らかにされた。さらに胃固有腺粘膜より発生する分化型癌もあることが判明した。

申請者の論文説明に対し、次のような質問がなされた。

1. 胃小彎側の腸上皮化生が小胃癌周辺の腸上皮化生を反映しているか
2. 検討症例中の多発癌に関し何か特徴的所見がみられたか
3. 胃底腺粘膜領域の判定・中間帯をどのように判定したか
4. 男女による腸上皮化生の程度の差に対する考え方
5. 表層拡大型胃癌に対する腫瘍進展様式に関する考察
6. 腸上皮化生が precancerous な病変なのか または paracancerous な病変なのかの考察と、これを明らかにするにはどのような研究方法があるか

これらの質問に対し申請者の解答は適切であり、問題点も充分理解しており、博士(医学)の学位論文にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者	主査	教授	馬場正三			
	副査	教授	金子榮藏	副査	教授	金子昌生
	副査	教授	竹内宏一	副査	助教授	中村真一